

史標 69

「史標」出版局

2021 年 10 月号

"SHIHYOU"69

2021 October (published 21st October)

ISSN 1345-0522

Editorial board: ODAKA Masaki, TANAKA Mayuko

Laboratory of Architectural History

Creative Science and Engineering, Waseda University

O.D.A."SHIHYOU"publishing

Room 8F-10, Okubo 3-4-1, Shinjuku, Tokyo 169-8555

TEL: 03-5286-3275

FAX:03-3204-5486

Mail Address:shihyo@lah-waseda.jp

目次 Contents

* * * * *

戦前東京における「観光文書」が与える都市・建築のイメージ pp. 1-10

The image of the city and architecture given by "tourist documents" in Tokyo before WWII

小岩正樹研究室 修士 2 年 森田歩

竪穴にすむ人々 pp. 11-25

The people who live in the pit

小岩正樹研究室 学部 4 年 斎藤祐希

コロナ禍における生活・研究活動 pp. 26-37

Life and research activities in COVID-19 pandemic

小岩正樹研究室一同

* * * * *

執筆者略歴、執筆後記 p.38

お知らせ p.39

戦前東京における「観光文書」が与える都市・建築のイメージ

The image of the city and architecture given by "tourist documents" in Tokyo before WW II

小岩正樹研究室 修士課程 2 年 森田歩

1. 研究背景・目的

本稿は 2020 年度小岩研究室で行なっていた「建築広告研究会」の同年度ゼミ活動報告会での発表をベースとし、再編したものである。

広告とはその時代や社会、人々の価値観を大きく反映し、同時に広告は人々や社会に影響を与えるものである。本稿では、広告を「あるものの情報を人々に知らせ、そのものへの興味を抱かせることで行動を促すもの」と広義的に捉えた上で、都市や建築とより近い関係にある「観光」ならびに観光案内書などの「観光文書」に着目した。

第二次世界大戦以前（以降、特筆ない限り第二次世界大戦以前を「戦前」と称する）、鉄道の発達や近代化に伴って、国が主導となり「観光」を推進していき、特に国内のみならず、海外に向けても行われていた。その背景には政府による富国強兵や外貨獲得などの背景があり、当時の「観光」にはプロパガンダ的性格を有していたと捉えることができる。

そういった時代背景の中、戦前においては現在と比較し、人々が手にすることができるメディアが限られていた。そのため、戦前において、観光を促す「観光文書」の持つ影響力は大きかったと推測することができる。特に戦前の観光文書は個人や民間だけではなく、政府が発行したものが多く存在した。それら観光文書は広告的な性質を持ち、民衆だけではなく、実際の都市空間へと影響を与えていった可能性も考えられる。

この背景を基に、本稿では戦前における観光ならびに観光文書に焦点を当て、観光文書の分析を通して実際の都市や建築との比較を行う。それら分析を通して、広告としての性質をもつ観光文書が実際の都市や建築に与えた影響を明らかにすることを本稿の目的とする。

なお観光のための案内書（ガイドブック）や個人が書いた紀行文など、旅行や観光に関係する文書を本研究では「観光文書」と称する。

2. 研究方法

本稿では「観光」、「観光文書」と都市と建築の関係性を見るために、特に近代化や観光政策、そして鉄道の発達などによって一般に「観光」という文化が誕生した戦前の東京に焦点を当てることとした。また、戦前においては現代と比較し、人々が情報を得られるメディアは限られ、その中でも観光案内書をはじめとした「観光文書」は戦前から多く出版され、それらは人々の観光や都市に影響を与えていったと推測できる。

以上を踏まえた上で、以下の方法で研究を行なった。

（1：前提）戦前における「観光」の特徴を当時の政府による観光政策なども踏まえて整理し、以降の論の前提とする。

(2: 選定) 戦前に発行された「観光文書」の特徴を整理した上で、分析に用いる観光文書の選定を行う。

(3: 分析) で選定した観光案内書の記述から、当時の東京の記述を整理・分析を行う。

(4: 考察) 分析から特に時代的な変化が著しかった地域である浅草を対象に、近代化の象徴的建築でもあった「凌雲閣」と「吾妻橋」について、より詳述な分析を行い、観光文書が都市、建築に与えた影響を明らかにしていく。

3. 戦前日本における観光の概要

近代以前から日本において「旅」は大きな文化の一つであった。近世においては五街道の整備などで旅のインフラが整い、特に伊勢参りなどは多い時で年間 100 万規模の人々が参拝し、同時に宿泊施設や茶店なども整備され、旅文化は大きな隆盛を迎えた。

近代に入り、鉄道、特に東海道線が開通すると、「旅」が大きく変わっていった。今まで徒歩を中心とした移動手段が鉄道によって置き換えられ、それは移動時間の短縮になり、旅というものを根本から変えてしまった。なお、ここで近世までの徒歩を中心とした「旅」から、近代以降の鉄道を中心とした「旅行」へと変わっていったという見解もある^{*1}。

特に移動が主たる要素であった線的である「旅」から、移動をなくした「旅行」では、目的地を主とした点的なものとなった。そして、同時に「観光」という語が一般的に用いられるようになったのもこの明治初期だと考えられる。

明治時代において、国は様々な観光政策を打ち出していった。1869 年、明治政府によって関所が廃止され、誰もが自由な移動ができるようになった。1872 年には新橋ー横浜、1889 年に東京ー神戸間の官営鉄道が開通した。鉄道の開通は今まで長期間の移動が必要であった観光地に容易に行くことができるようになったと同時に、各地域に大きな影響を与えていった。

また同時期、明治政府は富国強兵や外貨獲得のため、国際観光へも注力していった。西洋技術の導入のために来日した「お雇い外国人」たちの影響によって、軽井沢などの避暑地や富士屋ホテルなどの西洋式ホテルの建設などが進んだ^{*2}。

明治政府はさらに国家が主導となって観光を推進するために、外国人観光客を誘致することを目的に 1893 年に貴賓会を設立した。さらに貴賓会の理念は 1912 年のジャパン・ツーリスト・ビューロー、1930 年の国際観光局へと引き継がれていき、観光の礎をつくっていった。

4. 戦前における観光文書の概要

4-1. 近世における旅と観光文書について

近世において、既に旅に関する多くの書物が出版されていた。近世初期においては大名の参勤交代の記憶として「道中日記」が作成され、近世中期になると一般の旅行者向けの「道中記」が出版されるようになる。さらに『道中独案内図』（寛政 4 年、1792）や『都名所図会』（安永 9 年、1780）をはじめとした、名所の紹介文と絵図が一体となった「名所図会」が多く出版されるようになり、のちの観光文書の礎となっていったと考えられる。

またこの他にも『東海道中膝栗毛』などの滑稽本や「富嶽三十六景」などの浮世絵なども、人々が旅の情報を得る手段であった。

このように、近世において既に旅と観光文書は切り離せない関係であったと捉えられる。

4-2. 明治時代における観光文書について

明治時代に入っても、近世で培われた観光文書の文化は引き継がれていった。明治初期においてはまだ徒歩中心の旅文化が残っており、「名所図会」などは引き続き出版された。その中でも、やがて写真が普及すると図絵は写真へと置き換わっていった。

そして、鉄道の発達に伴い、鉄道を中心とした旅行に移り変わると、近世までの「道中記」や「名所図会」から「鉄道旅行案内書」へと観光文書の中心も遷移していった。

明治中期では鉄道の発達、ならびに鉄道の国有化（鉄道国有法 1906 年）に伴って、官製による『鉄道院線沿道遊覧地案内』や『鉄道旅行案内』などの「鉄道旅行案内書」が出版されていった。また明治 41 年（1908 年）に鉄道院（のちの鉄道省）が設立されると、外国人向けの観光案内書も出版されるようになった。

そうして鉄道院の設置から鉄道省時代までの明治 41～昭和 10 年頃までは官製の多くの「鉄道旅行案内書」が出版され、当時の旅行・観光文化に大きな影響を与えたと考えられる。

また、そういった官製の「観光文書」が多く出版された一方で、民間や個人による「観光文書」も多様多様に出版されていった。特に東京に焦点を当てたものだと和田庄蔵編『東京名所独案内』（1896）や、また小説家としても名高い田山花袋の『東京の近郊』（1920）などがあり、これら個人による「観光文書」はより民衆的な視点から「観光」に影響を与えていったと考えられる。

4-3. 明治以降から戦前までの観光文書について

明治以降、鉄道網の急速な発達や海上旅行の普及、加えて国際化なども影響して、観光文書はさらに多様化し、多く出版されるようになった。各地域や都市に焦点を当てたものや、植民地や外地などの観光文書も出版されるようになった^{*3}。

そうした明治から昭和初期まで観光文書は大きな発展を遂げるが、紀元二千六百年記念行事（1940 年）を境にして、その規模は縮小していき、戦争によって観光文書の出版は一度途切れることとなった。

このように、人々の旅行と、その情報を知らせるメディアは近世から近代へと継続的に発展し、観光文書は戦前の日本における観光を支える文化の一つとなっていた。

5. 観光文書から見る戦前の東京における観光の実態

5-1. 観光文書から見る東京における観光の実態

本節では、観光文書に記された東京の記述から、戦前における東京の観光の実態について分

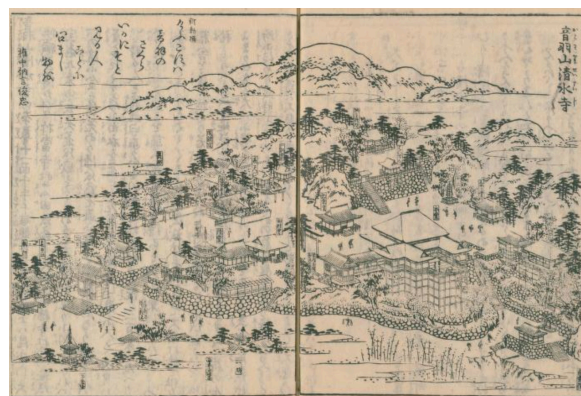


図1 『都名所図会』「音羽山清水寺」



図2 『鉄道院線沿道遊覧地案内』（明治 43 年）

析を行う。本節では観光文書の中でも、特に人々の観光に影響を持っていたと推察される官製の観光文書を中心とし、尚且つ閲覧可能であった表 1 の史料を用いて分析を行った。

分析方法としては上記の一次史料において共通に見られる東京の観光地の記述を見ていった。その中でも東京において記述や写真が掲載されている場所を表 2 に示した。

表 2 に示すように、その記載内容に差異はあれど、東京の観光においては、既にいくつかの主要な観光地が定まっていたことが分かる。今回、用いた史料はいずれも公的機関から出版されたものであることを踏まえると、ここで定まっていた観光地は、当時の政府が東京の中でも注力し、人々に印象付けようとしていた場所であると考えられる。

5-2. 観光ルートの分析から見る東京の観光について

本節では、東京の主要な観光地について、観光文書に記載されている「観光ルート」から分

表 1. 分析に用いた観光文書

文書名	出版元	出版年
『日本名所集』	ジャパン・ツーリスト・ビューロー	1936 年（昭和 11 年）
『日本案内記 関東編』	鉄道省	1930 年（昭和 5 年）
『鉄道院線沿道遊覧地案内』	鉄道院	1910 年（明治 43 年）
『旅程と費用概算』	ジャパン・ツーリスト・ビューロー	1928 年（昭和 3 年）
『旅程と費用概算』	ジャパン・ツーリスト・ビューロー	1935 年（昭和 10 年）

表 2. 観光文書から見る記述のある東京の観光地

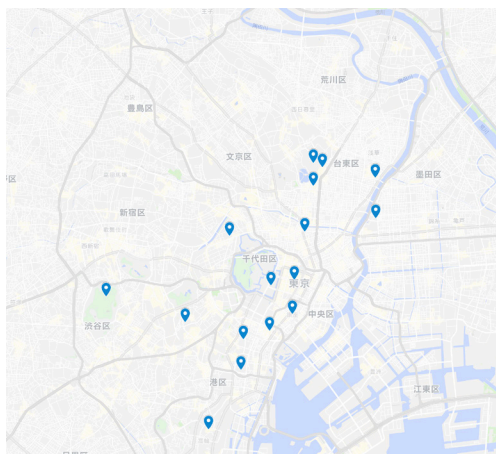
書籍名	発行元	発行年	東京駅	明治神宮	上野公園	浅草	靖国神社	赤坂離宮
『日本名所集』	ジャパンツーリストビューロー	1936						
『日本案内記 関東編』	鉄道省	1930	写真 (p.73-74)	写真 (p.73-74)	写真 (p.73-74)			
『鉄道院線沿道遊覧地案内』	鉄道院	1910			文 (p.6)	文 (p.6)	文 (p.6)	
『旅程と費用概算』	ジャパンツーリストビューロー	1928		文章 p.20			文章 p.16	文章 p.18
『旅程と費用概算』	ジャパンツーリストビューロー	1935	写真 (p.29) 文 (p.44)	写真 (p.29) 文 (p.37)	写真 (p.29)	写真 (p.29)	文章 (p.39)	文章 (p.36)

析を行うことで、観光と都市の関係を明らかにしていく。

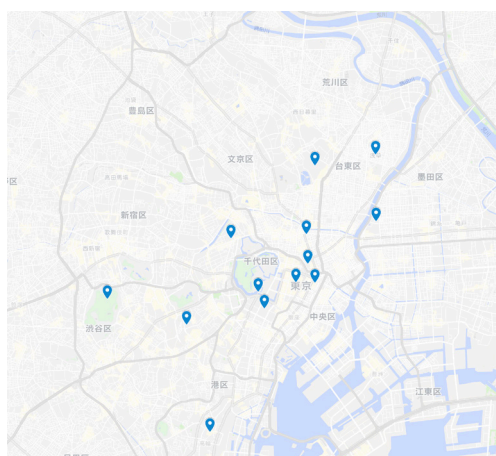
分析には、東京の記述があり、尚且つ観光ルートについて継続的かつ変遷的に分析することができる『旅程と費用概算』（ジャパン・ツーリスト・ビューロー編）の大正 9 年度版（1920 年）から昭和 13 年度版（1938 年）までを用いた。分析の詳細は次ページ図 3 に示す。

観光ルートを分析していくと、大正 13 年（1920 年）に生じた関東大震災から 2 年後の大正 15 年から、震災の慰霊地でもある「被服廠跡（現：東京都慰霊堂）」が昭和 13 年（1938 年）まで継続して観光ルートに組み込まれていたことが判明した。特に被服廠跡周辺の浅草などの下町地域は震災によって甚大な被害を生じた場所であり、このように慰霊地が継続的に観光ルートに組み込まれていくことは、震災が観光にも大きな影響を与えたことと捉えることができる。

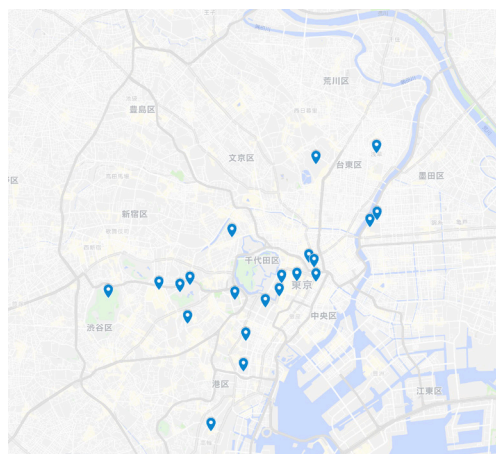
次に、関東大震災によって甚大な被害を受けた「浅草」地域に焦点を当て、震災前後によって、観光文書が都市や建築に与えた影響の一端を明らかにしていく。



『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(大正 15 年版)



『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(昭和 3 年版)



『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(昭和 5 年版)

上野駅
↓
上野恩賜公園
↓
神田須田町
↓
銀座
↓
新橋
↓
皇居外苑
↓
東京駅
↓
靖国神社
↓

明治神宮
↓
乃木神社
↓
泉岳寺
↓
芝公園
↓
愛宕山
↓
被服廠跡
↓
雷門
↓
上野

上野恩賜公園
↓
神田須田町
↓
日本橋
↓
江戸城桜田門
↓
東京駅
↓
靖国神社
↓
明治神宮
↓
乃木神社
↓

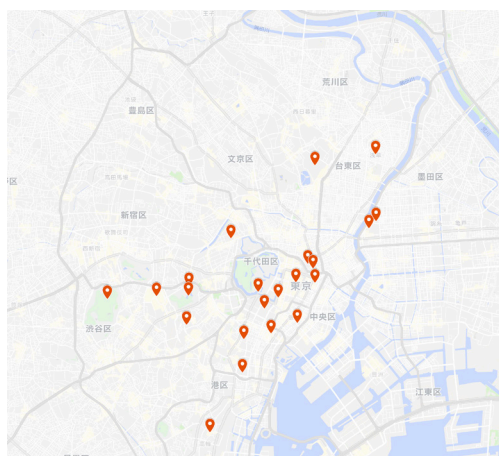
泉岳寺
↓
日比谷公園
↓
日本銀行
↓
日本銀行
↓
慰霊堂
↓
浅草

東京駅
↓
帝国劇場
↓
国会議事堂
↓
二重橋前
↓
靖国神社
↓
赤坂離宮
↓
赤坂御所
↓
明治神宮外苑
↓

明治神宮
↓
乃木神社
↓
泉岳寺
↓
愛宕山
↓
日比谷公園
↓
日本銀行
↓
日本橋三越
↓
国技館
↓

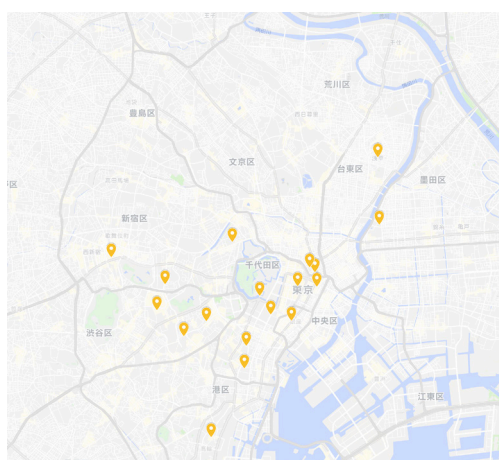
東京都慰霊堂
↓
浅草
↓
上野恩賜公園
↓
日本橋
↓
歌舞伎座
↓
新橋

図 3-1 『旅程と費用概算』における東京の観光ルートの変遷



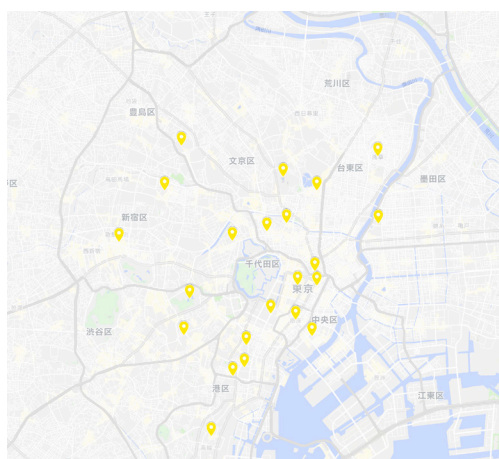
『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(昭和 10 年版)

東京駅	乃木神社	東京都慰霊堂
↓	↓	↓
帝国劇場	泉岳寺	浅草
↓	↓	↓
江戸城桜田門	芝公園	上野恩賜公園
↓	↓	↓
靖国神社	愛宕神社	日本橋
↓	↓	↓
赤坂	日比谷公園	歌舞伎座
↓	↓	↓
赤坂御所	日本銀行	新橋
↓	↓	
明治神宮外苑	日本橋三越	
↓	↓	
明治神宮	国技館	
↓	↓	



『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(昭和 13 年版・1 日ルート)

東京都	日本橋	靖国神社
↓	↓	↓
江戸城桜田門	東京都慰霊堂	日比谷
↓	↓	
明治神宮外苑	浅草	
↓	↓	
信濃町	日本橋三越	
↓	↓	
乃木坂	日本銀行	
↓	↓	
増上寺	愛宕山	
↓	↓	
泉岳寺	赤坂	
↓	↓	
銀座	新宿	
↓	↓	



『旅程と費用概算』における
東京観光ルート目的地
(昭和 13 年版・2 日間ルート)

東京都	靖国神社	東京大学
↓	↓	↓
乃木坂	上野	護国寺
↓	↓	↓
増上寺	浅草	早稲田大学
↓	↓	↓
赤羽橋	東京都慰霊堂	新宿
↓	↓	↓
泉岳寺	日本橋三越	赤坂御所
↓	↓	↓
築地本願寺	日比谷公園	愛宕山
↓	↓	
日本橋	神保町	
↓	↓	
銀座	神田駿河台	
↓	↓	

図 3-2 『旅程と費用概算』における東京の観光ルートの変遷

6. 観光文書から見る関東大震災前後の浅草について

6-1. 浅草地域における関東大震災の被害について

浅草は関東大震災によって大きな被害を受け、周辺の吉原公園や被服廠跡では多くの死者が出た。またのちに詳述する「凌雲閣」や「吾妻橋」、また上野駅など、浅草地域の近代化を象徴する建造物も地震や火災によってその多くが大破した。

関東大震災の影響は東京の観光にも大きな影響を与えた。鉄道省が出版していた観光案内書である『鉄道旅行案内』の大正7年、大正10年、ならびに関東大震災の翌年に出版された大正13年版を比較すると、大正13年版は以下のような記述が「東京」の項の冒頭にあり、震災の被害を知らせるものであった。

「(前略) 不幸大正十二年九月一日の大震火災の爲め、神田、日本橋、京橋、芝、下谷、浅草及隅田川向ふの本所、深川、いはゆる下町方面は殆ど全焼し、(後略)」*4

次節からは浅草と近代化の象徴であり、同時に震災の被害を大きく受けた「凌雲閣」と「吾妻橋」について、関東大震災前後における観光文書の比較から、その関係性について見ていく。

6-2. 凌雲閣の被害と観光の実態について

凌雲閣は「浅草十二階」とも呼ばれ、1890年(明治23年)に竣工した、眺望、展望のための建築である。浅草十二階の名の通り、12階建てで10階までが煉瓦造、11~12階が木造となっている。竣工当時はパリのエッフェル塔(1889年竣工)や大阪の凌雲閣(1889年竣工)などの高層建築が次々と建てられ、高所からの展望が大きな流行の一つとなっていた。

そういった流行ならびに、近代化が進む東京の中で建てられた凌雲閣は一躍民衆の注目の的となり、特に開業当時、新聞をはじめ多くのメディアによって取り上げられた。1890年の都新聞の広告を見てみると、縦長に描かれた凌雲閣に絵には、小さく人物や電線なども描かれており、凌雲閣の高さを際立てるような表現が見られる。

新聞の「藪入り記事」の変遷を見ていくと、凌雲閣の変遷を伺うことができる。竣工翌年、1891年の東京朝日の藪入り記事を見ると、凌雲閣の賑わいが分かる。しかし、竣工から10年後1900年の藪入り記事を見ると、既にその賑わいには陰りを見せており、1909年の記事を見ると、平日には殆ど人気がないという記述が見られる。

その後の新聞広告を見ていくと、演芸や漫才などが行われていることのみ広告されており、もはや竣工当初一番の特徴であった高さや望楼に関する記述が見られなくなっていった。その一方で、民衆的な視点からの「観光文書」として紀行文やエッセイを見てみると、また新聞などと異なった記述がみられる。その一例として田山花袋は

「東京に住んでいながら、そういう大観があるということも多くの人は知らずにいるが、実際、十二階から見た山の眺めは、日本にもたんとない眺望の一つであるということを言うのに私は



図4 凌雲閣開業新聞広告

躊躇しない。」*5

と述べている。このように民衆的な視点からは凌雲閣が当初から持っていた特徴である眺望について取り上げている事例もあり、時代や社会に捉われず、建築のもつ本質的な特徴を人々に示すことができていたと考えられる。

関東大震災によって半壊した凌雲閣の姿は写真や図絵に多く記憶された。その半壊した姿は関東大震災の被害の大きさを象徴するものであり、人々に震災の恐ろしさを印象付けたものであったと考えられる。

上記を踏まえると、竣工当初はその「高さ」を広告してきたが、やがて「企画」を広告し、人を集めるようになった。そして関東大震災後はその「被害」を示し、人々に震災の恐ろしさを示してきたと考えられる。

6-3. 吾妻橋の被害と観光の実態について

吾妻橋は日本における初期の鉄橋として 1887 年に竣工した。洪水で流失した木造橋の代替として架橋されたものである。関東大震災によって木造であった橋板(路面部分)が焼失。鉄骨部分は焼け残り、復旧工事が施されたものの、1931 年には新橋が竣工した。

「吾妻橋開橋式」(1887 年 12 月 9 日)に関しては、同 7 日に〈予告〉、同 10 日〈事後報告〉という形で官報に掲載された。官報において鉄橋の開橋式を扱う事例は吾妻橋の他に 3 件が確認されたが、いずれも吾妻橋より後年のことであり、掲載も〈事後報告〉のみである。このことから、吾妻橋は政府にとって、近代化を象徴する強調すべき存在であったと捉えられる。

吾妻橋は竣工直後から 1910 年頃まで、絵画・写真によって観光案内書に多用された。確認できたいずれの写真や絵画でも、鉛直方向のパスを打ち消した二点透視的な構図が採用されていることは特徴的である。確認できる限り、吾妻橋が観光案内書に登場する最後のものは、1914 年『東京案内』(石倉翠葉 編)である。

これらの観光案内書に記される文章としては、1890-1900 年代には〈構造が堅牢〉〈外観が壮麗、美麗〉のような文章が多く確認されることに対し、1900 年以降には〈橋上からの眺望〉〈周囲での営み〉に関する記述が増加する。

更に 1910 年代以降には複数の小説やエッセイの舞台として吾妻橋が登場するようになるが、これらの中での吾妻橋の扱いは〈世の無常を投影する対象〉〈自殺の場〉〈貧しい物売りの居る場〉といったネガティブな扱いであった。関東大震災後には、複数の書籍において〈吾妻橋の焼失〉と〈大火から逃げた人の入水と溺死〉がひとまとまりの文章として扱われることになる。



図5 関東大震災直後の凌雲閣

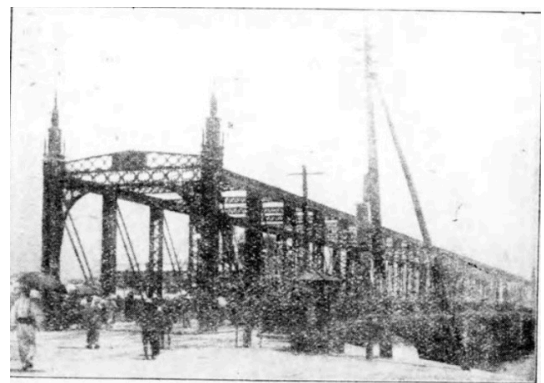


図6 『東京案内』(1914)における「吾妻橋」

竣工当初は最新技術の粋を集めた存在として認知されていた吾妻橋は、竣工後 10 ～ 15 年ほどはポジティブなイメージを持つものとして官報や観光案内書に掲載された。これは官庁や案内人側が市民や観光客に与えようとしたイメージである。いっぽう、吾妻橋は次第に新鮮さが薄れゆき日常の景色の一部となり、目新しさ以外の物語性を獲得することにより小説やエッセイの背景として登場するように変遷した。これはいち市民、いち観光客としてのライターが受け取ったイメージであるが、吾妻橋において頻出するネガティブなイメージは関東大震災によって急に生じたものではなく、むしろ震災以前から蓄積されたものであると判明した。

7. まとめと今後の展望について

以上、本稿では観光ならびに観光文書が都市や建築にどのような影響を与えてきたかを考察してきた。

近世から人々の旅や旅行に大きな影響を与えてきた観光文書は、近代に入るとより多様多種に出版され、戦前の日本における大きな文化の一つになっていった。

「観光文書」を分析すると、近代化著しい東京において、主要な観光地が定まっており、国が印象付けようとしていたことが明らかとなった。

さらに関東大震災前後の浅草に焦点を絞って観光文書や広告の分析をしていくと、民衆が抱く建築のイメージを形成してきたことが明らかとなった。

観光文書に関しては資料が膨大であり、本稿は最終的に関東大震災前後の浅草に焦点を当てたが、今回用いた史料から他の地域を見ていくこともできる。また、異なる時代や地域と比較していくことで、観光文書が建築に与えた影響を見ていくことを今後の展望とする。

注釈

- * 1 荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』創元社, 2018
- * 2 砂本文彦『近代日本の国際リゾート:一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社, 2008
- * 3 荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』創元社, 2018
- * 4 鉄道省篇『鉄道旅行案内』1926 (荒山正彦編『シリーズ 明治・大正の旅行 10』ゆにま書房, 2014 に収録)
- * 5 田山花袋『東京近郊 一日の行楽』博文館, 1923

図版典拠

- 図 1 :『都名所図会』1786, 国立国会図書館デジタルコレクションより
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555345?tocOpened=1> (2021/08/03 閲覧)
- 図 2 : 鉄道院『鉄道院線沿道遊覧地案内』1910, 国立国会図書館デジタルコレクションより
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/762305> (2021/08/28 閲覧)
- 図 3-1,3-2 : google map 基に筆者作成
- 図 4 :「都新聞」1890.11.5 (東京都江戸東京博物館『調査報告書 第 33 集』2018 収録)
- 図 5 : 東京都江戸東京博物館『調査報告書 第 33 集』2018
- 図 6 : 石倉翠葉編『東京案内』中央教育会, 1914, 国立国会図書館デジタルコレクションより
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/911425> (2021/08/29 閲覧)

豎穴に住む人々

The people who live in the pit

小岩正樹研究室 学部四年 さいとうさ (斎藤祐希)

「今年は光玉が少ない。作物が育たないから、冬を越せないかもしれない」

父はワントローにある夜そう告げた。

「作物は必ずしも横穴の中で作るものじゃないはずだ」

「いや、村の民が増えすぎた。地で作る物では足りなくなっているのが悪い。穴の作物のためには、光玉が必要だ。虫もなかなか出てこない」

「ならば鳥を穫ればいい」

「光玉も鳥は天の恵みだ。我々がどうすることもできない」

ワントローは父の言うことが理解できなかった。しかし村の民が皆、ムコウの民もコチラの民も、ろくに食えなくなっていることは分かっていた。

誰も起きていないだろう、明るくもなっていない内に、ワントローは一人黙って家を出た。崖に横に掘ってある穴の家を抜ければ、真っ暗な世界が広がっている。ワントローは目が良かった。天が暗いうちでも、丸い地と、村の家々であるいくつかの横穴と、地をぐるりと一周囲う崖がよく見えた。

ワントローは腕が長かった。そのうえ力が強く、爪が鋭く硬い。村を囲う垂直の崖を、ワントローはスルスルと登ることができた。遥か高いところに洞穴とも呼べぬ凹みがあり、ワントローはいつもそこで昼寝をしていた。

村の上で、ぎゃあぎゃあとうるさく喚いて飛ぶ鳥がいる。夜は静かに巣の上で寝ていることを、ワントローは知っていた。ワントローは崖から大きな石を掘り出し、巣の中に投げる。それは三羽中二羽の頭に当たり、羽を散らしながら地に落ちた。

ワントローはまたスルスルと崖を下りる。その頃にはすでに天は明るくなっていた。上を見上げれば、地をぐるりと一周囲う崖が無限にそびえ立っていて、まんまるの白い天が人々を見下ろしていた。

地面に真っ直ぐで大きな影が落ちている。それは村を二つに分けるものであった。村の民はそれを天の腕と呼び、それを跨ぐことを禁じた。村人は「ムコウの民」と「コチラの民」と互いに呼んで、分たれている。

鳥の死体は、「ムコウ」に落ちていた。

「まだ早朝だ。ばれるまい」

ワントローはさっと太い影を跨ぎ、息絶えた二羽の首を掴むと、崖に掘られた穴の家に持ち帰った。

その途中、地に何かコツンと落ちた音がした。拾ってみれば、それは小さな光玉であった。

「ふん」

ワントローは鼻を鳴らしながら、それを懐にしまった。

昼になって、ワントローは皆の前に突き出された。

「こいつが村の掟を破った」

ワントローは父を睨む。

「なんのことだ」

「どうせまた、崖を登って鳥を捕まえたのだろう。それはだめだ。鳥は天のものだ。天が我々に恵みを与えるとき、鳥は自ら地に下りる。捕っていいのはその鳥だけだ」

「そんなことを言ってる場合じゃない。人が飢えて死ぬんだ」

「駄目だ。それは天のものを盗んだことになる。必ず天罰が下る」

すると、ムコウの民もコチラの民もワントローを囲んで、やんやと言う。

「そうだ。光玉のお恵みが少ないのは、お前が掟を破ったからだ」

「病気も多いぞ。死産も多い」

「バカ言え、俺はしばらく鳥を捕まえていない。光玉が少ないのは関係ない」

「天はお前の邪な心を見通しているのだ」

天とは一体何なんだ、とワントローは言い返したくなった。

そのとき、ムコウの民の小さな娘がワントローを指差した。

「私、そいつが天の腕を跨いでいるのを見たよ。今朝」

「貴様、一体どれほど我々に災いを降らせるつもりだ」

父がワントローの頭を叩いた。ワントローはいよいよ限界であった。立ち上がり、啞然とする村の民の前、両足で影を跨ぎ腕を組んだ。口汚い非難がワントローに浴びせられるが、しかし彼は無然として、ただ立っていた。父はそんなワントローに脅しかける。

「ワントローよ。お前は人よりよく物を食うな。お前を今括り殺せば、我々はいくらか飢えずにすむわけだ」

「俺を殺すか、俺を殺して、その死者の穴に投げ入れるのか」

ワントローは村の中心にポツカリと空いた、人一人が落ちそうな穴を指差した。その穴は、どこまでも続いているように思えた。そこから落ちて生きて帰ったものはいない。

「そうとも。先祖に叱られてくるがいい」

「構わないとも。だが俺はそんな穴には落ちない。俺には行くべき場所がある」

ワントローはそう言って、上を指差す。村の民は皆呆れかえった。

「ワントロー。お前は鳥じゃない」

「だが俺は崖を登れるぞ」

「人は地の者だ。土や虫、作物や木、そして人は、天にはいけない。鳥や光玉といった天の者とは違うのだ」

父の言に、ワントローは笑った。

「お前たちは、皮膚を破ったことがないのか。中には真っ赤な肉があるぞ。鳥と同じだ。土や虫や作物や木とは違う。俺たちは鳥と同じだ。天の者だ」

「ならばなぜ、我々は地の底に住み、鳥は天を羽ばたいている」

「我々は地に落とされた。だが崖があれば登れる。これは試練だ。天か何かは知らないが、何者かが俺たち人に下した試練だ」

「お前、本当に天罰が下るぞ」

父は仇を見るような目でワントローを睨んだ。すると突然、ワントローは走り出し群衆を抜け、崖へと飛びついた。

「奴を逃がすな！ 逃せば天が怒り、この村にさらなる災が降る。滅ぶやもしれん！」

ワントローを止めんと、ムコウの民もコチラの民も各々の農具を手に取り追いかけた。しかしワントローは素早く、誰も崖に登っている彼を捕らえることはできなかった。ワントローは少しの切り傷を負いながらも、やはりスルスルと上へと登っていくのであった。

ワントローはとにかく崖を登り続けた。夜と昼を一巡した頃には、もう村のあった円形の地は、小石ほどまで小さく見える。ワントローはこれまで崖登りで疲れたことなど無かったが、今回ばかりはもう意識が朦朧としていた。

まず喉が渴いた。この一日は雨が降らず、口の中で舌が張り付くほど乾燥していた。また、空腹が酷かった。村が不作だったため、ろくに食べていなかったのだ。体を上へと引っ張り上げる腕にも力が入らなくなってきた。

何より、村を出るときに負った切り傷がまずかった。最初は気にしていなかったが、血が流れ続け、周囲が赤く腫れ始めた。ズキズキとした痛みがワントローの脳を揺らした。

何も考えずに腕と足を動かし続け、しばらく。もう限界といったところで、ふと彼の視界が暗くなった。もう夜かと思えば、何か長い帯状の物が崖から反対側の崖まで渡っていた。それによりできた影が、天の光を遮り影を遥か下まで落としていたのだ。

「まさか……これが天の腕か」

ワントローは残った力を振り絞り、その上に体をはい上がらせた。もう二本の足で立つ余力もない。伏せて動けないまま、ワントローはその「何か」に手を這わせる。

「これは、石だ。それも地の者では無い。削り出されたものだ」

そしてその板状の石を宙に繋いでいるものは、紐であった。

「天の腕は……地の者でも天の者でもない。人だ。人が作り上げたものだった。ははは、やったぞ」

ワントローはこれが何という名を持つのかは知らない。しかしそれだけははっきりとしていて、ワントローはささやかな喜びを得ながら、深く眠りについた。

ガラガラという車輪の音とともにワントローは目を覚ました。彼は寝かされたまま、手押し車に載せられて運ばれていた。

「おう、起きたのか」

見慣れない服を着た毛むくじゃらの男であった。体のいたる所に道具のような物をぶら下げている。曰く、ワントローが寝ていたところを見つけて、死ぬかもしれないと運び出したという。

「しかしお前さん、なぜあんな吊り橋の中程に寝そべっていたんだ」

「つりばし……？ あれは、つりばしというのか」

「そんなものも知らんのか。俺も学がないと神父様に言われるが、お前さんは俺以上だな」

暗く、点々と壁に埋め込まれた光玉が道を照らしている。どこまでも続いている横穴であった。住む場所だけを作った洞穴の家と違い通行のためのそれは、ワントローにとり新鮮なものだった。

「この穴はどこまで続いている？ どこに運ぼうとしているのだ」

「クスダミという大きな街だ」

「街？ クスダミ？」

「ここらじゃ一番大きな穴だぞ。知らんということは、お前さんよほど遠くから来たのか。どこから来た？」

「村だ」

「村？ 村の名前は？」

「そんなものはない。あのつりばしとやらの下から、登ってきた」

「何？ あの下に村があったのか。それは知らなんだ。それに、そんな体一つで、崖を穴の底から登ってきたのか。なんて身体能力だ」

毛むくじゃらの男はしきりに感心していた。

それからしばらく、ワントローは黙って転がされた。寝ているうちに水を飲ませてくれたのか、喉の乾きは収まっていたが、ワントローはまだ腹が空いていたし、傷も痛かった。

穴の中は徐々に明るくなり、体を起こして先を見れば、小さな「天」のような白い光が進む先の遠くに見えた。それが毛むくじゃらの男の言う「街」だということを、ワントローは穴を通り抜けたあとに理解した。

そこは別世界である。天を見上げれば真っ暗だというのに、至るところに光玉が埋め込まれていて、夜とは思えない明るさであった。そして昼でもないのに人がたくさんで歩いている。人々は毛むくじゃらの男ともまた違った服を着ていて、ワントローの目から見ても綺麗なものであった。

円状に囲む崖は村のものと比べ明らかに広かった。ワントローの優れた目でも向いの崖の岩肌がよく見えない。天も村と比べてやや大きかった。その街の周りを囲う崖は、よく見れば垂直ではなかった。少し手前にせり出している。

何よりワントローの目を引いたのは、地の底からそびえ立つ四角い石のなにかである。それはよく見れば、同じ大きさに小さく削った石を積んで作った物であった。それがいくつもある。「ここは上流の者のみが住める階層だ。お前はここには住めない。お前は下層まで連れて行く」

ワントローは毛むくじゃらの男の肩を借り、階段を降りていく。ワントローが地の底だと思っていた所は底ではなかった。そそり立つなにかと同じく、小さな石が敷き詰められている。人が作ったものだ。人が作った「地」があることを、ワントローは初めて知った。その人が作った地が、いくつも宙に折り重なっている。

石の地を歩き、また別の階段を降り、ときに吊り橋を渡り、二人は下へ降りていく。人々の服はだんだん変わっていき、ワントローの着ているそれに近づいていった。また徐々に暗くなっていく。降りている途中で朝になり天から光が降りてくるが、ワントローのいる所には届かなかった。人の作った石の地が光を遮り、影を作っていた。あの吊り橋が天の腕を作っているのと同じである。

やがて石ではなく土の地を踏むようになったが、二人はまだ下へと降りていく。ワントローはここに来てから全く訳が分からなかったが、足りない知識を脳内で回し、答えを導いた。

「まさか、地の下に穴を掘ったのか」

「おう。もうどこか本当の底だったのか、誰もわからねえよ」

この街の人々は横穴だけではなく、縦にも穴を掘っていたのだ。ワントローは、地のさらに「下」がある事実、頭を叩かれた気分であった。

あたりは真っ暗になり、ポツポツと光玉が浮かぶように光っている。毛むくじゃらの男はそれ以上下に進むことはなかった。

「おう、神父様」

毛むくじゃらの男が話しかけたのは、上の者とも下の者とも、横にいる毛むくじゃらの男とも違う服を着ていた。上の者のように布は綺麗なものだったが、ワントローの服のようにボロボロであった。

「こいつ、橋の上で寝ていたんだ。村から崖を登ってきたらしい。診てやってくれ」

神父はその言葉に眉をひそめたが、一つため息をついて頷いた。

「しんぷ様。よろしく」

「様は結構です。我らは等しく地の底に住んでいる」

神父はワントローを何人か人がいる穴の部屋に運び、ドロドロした物を食べさせた。ワントローの傷を見て、これは酷いと水で流し、包帯を巻いた。

ワントローは布の上で寝かされた。枯れ草ではなく、地でもない所で寝るのは初めてだったが、疲れからかすぐに眠りについた。

ワントローはしばらく教会に寝泊まりした。ワントローの知識のなさを憂いた神父は、彼によく教えた。

「ワントローの通ってきた横穴は、『道』と言います。あの吊り橋が作られた地の底の村、名前が書かれていた石版を見つけました。『サン村』というそうです」

神父はワントローに馴染みのない口調で話すが、不思議と聞き心地が良かった。後にそれは上流階級の者が使う上品な言葉であるとワントローは知る。

「そうなのか。聞いたことがない」

「閉ざされた村なら、他の村や街と呼び分ける必要がありませんから。他の村につながる道もなかったようですし、記録上は滅んだとされています。まさかまだ残っていたとは。知られるわけにはいきませんね。君を連れてきた彼にも、黙っておくように言っておきます」

「それはなぜ？」

「上流階級の者……特に領主は、そこに穴を掘って攻め込むかもしれません」

「攻め込んでどうする」

「食べ物を取り、そこで作物を育てさせるとか」

「しかし、俺が出たとき村は不作だった」

「いえ、何より領主は木を欲しています。村があれば確実に木を育てている。違いますか」

「確かに」

神父と話していると、ワンタローの心は安らいだ。なにより、知らないことを知るのがワンタローにとって、とても気分のいいものであった。

街に来たとき見た、石で積まれた高い物は建物といい、また塔と呼ばれていることを知った。また建物には他にも城や家、館といった違いがあることも知った。それらは四角く作られていて、上層は部屋も全てが四角いと知った。教会の部屋も四角に近いが、円を中心から割ったものが多い。

ワンタローは他にもあらゆることを知り、生まれ故郷であるあの村が、閉ざされた狭いものであったことがよくわかった。

すっかり体が元気になったころ、ワンタローは神父にある所へ連れて行かれた。そこは広い穴であった。これを大聖堂ということ、ワンタローは神父から教えられていた。

「これが、大光石です」

堂の中はひどく明るく照らされていた。多くの人が地べたで礼拝をしていて、中心には大きく明るいものがあつた。

「大昔、光石を集めて作ったのだとされています。預言者がここに作れとお告げをたまわったのです。教会はまずここから作られました。ときおり欠片を頂き、貧しい者たちへ贈っているのです」

「光石？」

「あなたのいう、光玉のことです。天の気まぐれで落ちてくる、夜でも光る石のことです」

「……これは、なんのために作ったのだ」

「これは地の底に住む、我々の定めであり、覚悟であり、辿り着くところです」

神父は何を言っているのかわからないときがよくあつたが、今回は特にワンタローにとり理解のできない話であった。

「人々ははるか昔、天に住んでいました。しかし罪を犯し、神によって地の底に落とされたのです。」

人々は罪を償わなくてははいけない。我々は生まれたときから罪を担う、地の底の民です。しかしそれは同時に使命でもあります。神は人々を地の底に落とすとき、『地の底を天とせよ』とおっしゃいました。我々は地の底を天のように照らし、素晴らしいものとしなければならない。大光石はその象徴です。天を我々の手で、ここに作り上げるのです」

「神とはなんだ」

「神は天に住む、我々を見下ろす者たちです」

「天に人が住んでいるのか」

「人ではありません」

神父の言っていることは、ワンタローにはついぞよくわからなかった。

「人でなければ、鳥か？」

「鳥でもありません。しかし、鳥は天の使いです。光石と同様、神が我々の食を豊かにするため、下したものです」

「そうか。しかし神父。私にはこれが天には見えない」

ワンタローは堂の中心にある大光石を指差した。神父は慌てて、彼の腕を下ろさせる。

「やめなさい。無礼な行為になります」

「これを作った理由もよくわからんし、崇める理由もわからん」

「わからないことは知ればいい。それがまた、天を作る一歩目と……」

ワンタローは踵を返し、大聖堂を出た。神父は彼を追いかける。

「どうしたのです」

「神父。俺は思い出した。俺にも同じく使命が、試練がある。俺は登らなければならない」

「ああ、そうですか、いや、いつかそうなると思っていましたが」

気落ちしたような神父の声に、ワンタローは振り返った。

「止めないのか」

「止めません。愚かだと思えますし、理解し難いものですが、我々は共に等しく地の底に住もう者です。神は愚行もお許しになる」

「すまなかった。あなたを父と同じだと思っていた」

神父は笑った。

「本当は君の父のように止めたいですよ。あなたはよくこの世界を知ろうとしていた。それは私にとってとても好ましいものでした。あなたが登りたいと言うなら、きっとそれが正しいでしょう」

ワンタローはその身一つで出ようとしたが、神父は彼にいくつかの光石を握らせた。

「上では別の貨幣が必要ですが、それなら確実に換金できるでしょう。まずは君を連れてきた男に会いなさい。そして領主へ」

「領主？ なぜだ」

「彼は貧しい者には冷酷ですが、登る者には寛大です。彼も同じく、天を目指している。さあ行きなさい。あなたが死なないことを、神に祈っています」

神父に見送られ、ワンタローは教会を出た。

ワントローは上へと階段を登っていった。長い道のりだったが、崖を登るよりいくらかも容易であった。

上層へ行くにつれ、彼は人々に奇異な目線で見られるようになった。なるほど確かに、ワントローの粗末な格好は高貴な人々の間では浮いていた。しかしワントローはひたすらに上を目指した。

途中で腹が減ったので、光石を金とやらに変えて、それで飯を食った。腹を満たし水を飲み、さらに階段を上って上を目指す。

天の光が見える頃まで登ったところで、毛むくじゃらの男に会った。彼はまるで待っているかのようにそこに居た。

「久しぶりだな。よく来た」

「驚かないのか。まさか俺がここに来ると知っていたのか」

「ああ知らなかったとも。だが分かっていた。お前さんはきっと、生来の登る者だ」

ワントローは領主の城へと案内された。城はこの街で最も高く、すこし斜めに歪んでいた。召使いに着替えさせられ、慣れない綺麗な服を纏い、領主の前で跪く。

「お前がワントローか。直接話すことを許そう。私は登る者を歓迎している」

「俺は名もない村の生まれだ。上流の言葉遣いはできない」

「構わん。むしろ登る者たちではできる奴のほうが少ない。しかし村の生まれで、本当に崖を登る事ができるのか」

ワントローは許しを取り、壁の柱を素手でスルスルと登った。その様子に領主は歓声を上げた。
「すごいな。やたらと腕が長いと思ったが、道具も使わず登るか。しかしどうも知識はないようだ」
「知識だと？」

「高く登るには知識がいる。近頃では事情が変わり、色々と教えることが増えた。ところでいつまでそこにいる。さっさと降りてこい」

確かにこのままでは無礼極まりないと、ワントローは石床まで降りて膝をついた。
「金と道具は私が用意しよう。しばらくは見習いとしてそのカワズから知識を学べ」
「カワズ？」

「お前をここに連れてきた、無駄に毛が多い男だ」

ワントローは初めて毛むくじゃらの男の名を知った。領主は腹を揺らして、ワントローに聞く。
「ワントロー。お前はなぜ天を目指す」

「それが地に住む者に下された試練だからだ。我々は本来、天に住む者だ」

「ふむ。神父共と同じようなことを言う。しかしそんなお前が天を目指すのは滑稽であり、高慢だな。だがそれでいい」

「領主殿は、なぜ天を目指す」

「家訓だからだ」

「家訓？」

「先祖がある日、捨て穴を見に行って、危うく落ちそうになっらしい」

「捨て穴……？」

「糞や尿やゴミ、貧者の死体を捨てる穴だ」

「ああ、死の穴か」

「ほう？ お前の村ではそう呼んでいるのか。神父共の『逃れるべきところ』より良い名前だ。

そう、その死の穴に落ちかけた、というか落ちたのだ」

「すると、その先祖は死んだのか」

「なら私はここにいないな。先祖は死ななかった。手足を穴の壁に踏ん張ったのだ。そして助かるために登ろうと上を見た。すると、穴の外が白く丸い光に見えたのだ」

領主は上を見上げ、ガハハと笑った。

「それはまさしく天だった。あの小さな豎穴から見れば、地の底は天に見えたのだ。なあ、ワントローよ。私の言いたいことがわかるか」

ワントローは首を傾げた。

「崖を登れば、より広い地が広がっているかもしれない。本当の地の底は、はるか上なのかもしれない。我々は大きな豎穴に住んでいる」

ワントローは登る者の見習いとして、長い期間カワズの元で過ごした。それは昼と夜を三百ほど繰り返すほど長かった。

ワントローはある時毛むくじゃらの男、カワズに聞いた。

「カワズ。本当に、崖の上に地があるのか」

「あるだろう。お前さん、道で俺に運ばれていたとき、穴の出口が天のように見えたと言ったろ」

「ああ」

「出口に近づくとき、天のように見えたものはどうなった？」

「だんだん大きくなった」

「そうだ。遠くの物は小さく見え、近くの物は大きく見える。そして、天の大きさは村より街のほうがデカいだろ？」

「ああ」

「人々は崖が無限に続いていると思っている。つまり天が無限に遠い先にあると思っている。だがそうじゃない。確実にふちがある。ふちがあるということは地面がある」

「つまり、登れば天は大きくなるのか？」

「そうだ。それを俺はこの目で見た」

なるほど道理であると、ワントローは頷いた。

またある時、ワントローはカワズに聞いた。

「なぜ領主殿の城は傾いている？」

「今代の領主は、このクスダミの豎穴が垂直ではないことに気づいたんだ」

「それは、この街の特徴じゃないのか。俺は来たときにそう思った」

「そうじゃない。お前さんが言っているのは、街の塔が立ち並んでいる空間のことだろう。あれは人が崖を大きく削ったのだ」

「なぜだ」

「石材の確保と、人が増えたから、土地を横にも膨らませたんだ。ある高さから先は、人の手が入っていないほぼ垂直の崖だ」

「ということは、そこが実のところ垂直じゃないのか」

「人の目では分からないが傾いているらしい。その穴が傾いている方向を、領主は南と名付け、そこから直角に四つの方向を決めたらしい」

「その話が、領主の城とどう関わる」

「それまでは石を高く積んでいけば、いずれ天に届くと考えていた。しかし穴が斜めとなると、垂直に建てるといずれ崖にぶつかるんだ。だからってことで、床をずらさなくてはならなくなったわけだ。石を積み上げてはだめだから、崖から木の柱で突っ張るように城を作ったらしい」

ワントローは、領主が多く木を欲している理由を知った。

さらにまたワントローはカワズに聞いた。

「豎穴の底がここだと言うなら、死の穴の底は何がある」

「さあ？　しかし領主殿は、何もないと考えているらしい」

「何も無い？」

「無計画に穴を掘ると、そこに毒が溜まって人が死ぬことがある。穴には風を通さないといけ無い。ならば、俺たちが住む豎穴にも毒が溜まってないとおかしいよな。しかし領主殿の先祖は、穴に向かって風が吹いていることに気づいたそうだ。だからここには毒が溜まらない。領主殿がいうには、何も無いと風が吹くらしい。俺にはよくわからん」

その理屈はワントローにもよくわからなかった。領主はよく物事を知っているらしかった。

「カワズ。お前は昔、自分のことを学がないと言っていたな。しかし俺にはそうは見えない。神父よりも賢く見える」

「よせ。俺はこれしか知らない。他のことなんて何も知らないし、なんの役にも立ちやしない。登ることにしか役に立たない」

「ならばそれでいい。神父は下に閉じこもっているだけだ。お前は登ろうとしている」

「まあ、神父様は頭が固いからな……」

カワズはその毛むくじゃらの頭をボリボリと掻いた。

「ワントロー。俺が登る理由を知っているか」

「知らん。上にある地を目指しているのではないのか」

「違う。俺は金がほしい。たまたま登るのが得意だったただけだ。登れば家族を養える」

ワントローは、カワズに子供がいることを初めて知った。

「俺もお前さんにしたら変わらない。地の底で蹲っている人だ。ワントロー。お前さんには、その、女とかいないのか」

「生まれてこの方知らん。興味もない」

「サンの村にもか」

「ああ」

「そうか。それはよかった。しかし女と番い子を生むのは、人の摂理だ。それが人だ。試練があるといったな。お前さんは人になりたくないのか」

「さあ？ もうよくわからん。神父や領主殿や、カワズの話聞いてさらにわからなくなった。しかしそこに地があるなら、俺はそこに行きたい」

カワズは笑った。

「俺だって、天に行くのは夢だ。お前さんが素手で崖を登ったと聞いて、俺はお前さんになら夢を託せると思った」

しかしワントローには、夢だのといったものはよくわからなかった。

また三百ほど昼夜を数え、ワントローは本格的に登る者の仕事に入った。

「領主殿は半ば、天へ届く城を作ることを諦めている。しかし人が崖に登るにも限界がある。そのため別の方法を取ることにした。それがこれだ」

見上げれば、崖に人が住める程度の横穴がいくつも空いている。上へ向かって直線上に空いており、どこまで続いているのか下からでは見えないほどである。

「崖にいくつか休憩地点を設けた。これを継いでいけば、やがて天へ届く。領主殿は天へとすべての人を運ぶことを目指しているらしい。この穴と穴をハシゴで繋ぐか、穴の中で階段を掘るかは検討中だ」

つまり登る者の仕事とは、この休憩地点となる穴を掘ることと、物資を運ぶことであった。ワントローはこれまでカワズに簡単な建築知識を教えられていた。

「穴を掘ると土が出るはずだ。その土はどう運ぶ」

「下を見ろ」

そこには石積の歪んだ床と、中心に穴があった。それらは全て土で汚れている。石積の部屋の柱や天井を裏から見るとこうなるのかとワントローは思った。

「この穴は捨て穴にまで繋がっている。上層から下層までぶち抜いているんだ。ここに土を捨てていく」

「上から土を落とすとなると、下では勢いがついてしまうじゃないか」

「だから土を落とすときは優しく、崖に沿って転がすように落とすんだ。この休憩所は南にある。坂のようになっているから、土は宙に放り出されない」

「よく考えられているのだな」

「今日は五つ目の休憩所まで物資を運ぶ。道具の使い方はわかっているな？ では行くぞ」

ワントローは身につけた数々の道具をジャラジャラと鳴らしながら、久しぶりに崖を登った。

また三百ほど昼夜を数える頃には、ワンタローは見習いではなくなっていた。

「最近は城の増築が盛んだな」

「木が多く手に入ったらしい。まあ、俺たちにはあまり関係のないことだ」

「今日はやけに、荷物が多いな」

「上で大人数が仕事をしている。水と食料、物資もそれだけ必要だ。それと俺たちも合流するから、穴を掘る道具も持っていく」

「俺は大丈夫だが、カワズはどうだ？ お前の分も持つか？」

「そんな歳じゃない。問題ない」

二人は休憩所で休みながら、崖を登っていく。

「しかし大仕事とは、一体何をしているんだ」

「よその街の登る者が来たらしい。それで、豎穴同士で横穴の道を繋げるんだと」

「そんな高いところに作ってなんの意味がある」

「高いところに作れば争いになっても攻め込まれない、らしい。そう領主殿は言っていた」

「政治のことはよくわからん」

毛むくじらの男カワズは、最近急に地位が上がった。今は、クスダミの登る者の中では高いところにいる。そのおかげで領主ともよく話をしていた。

カワズとワンタローは、目的の横穴の一つ下の休憩所まで登った。すると、上から喧騒が聞こえた。

「喧嘩か？」

「何か言い争っているようだ。なんだろうな」

二人して上を見上げていると、ワンタローの視線の先で、ちらりと何かが映った。ワンタローはカワズを穴の中に引っ張りこんだ。次の瞬間、大量の土が上から滝のように降ってきた。そしてまた、上の喧騒が大きくなる。

「なんという土の捨て方だ。下が大騒ぎになっちまう」

「よその街の登る者がいるといったな。ここでは優しく土を落とす、という掟を知らないんじゃないか」

「それはまずいな」

二人は急いで、土を被らないように横に避けながら、崖を登った。やがて喧騒はより鮮明に聞こえてくる。

「指図するのか。我々に」

「当たり前だ！ 掟を守らんからだ！ お前のせいで人が死んだらどうする」

「下等のもの達など放っておけばいい」

「傲慢がすぎる。ここは俺たちの街だ。俺たちに従え」

「そんな仕事では遅くなるといっておるのだ。毒光石で育った作物を食ってる者共は、やはり頭が悪くなる」

ワンタローが登ってきたのを見て、髭の長い男は振り返った。

「くく、なんという奇妙な体よ。それも毒光石の仕業か」

「毒光石とはなんのことだ」

「お前たちや光石教がありがたがっている石のことだ。天の恵みである陽光を受けた作物ではなく、これで育った作物を食いすぎると、病気や死産、奇形な子供が生まれやすくなるのだ」

「戯言を！」

言い争っているうちに、また別の男が土をたっぷりと掘って、それを投げ捨てた。中には大きな石も混じっていた。

「やめろと言っている！」

「ははは。いいぞ。この速さなら、一ヶ月で済みそうだ」

髭の男が笑ったあと、地響きがなり始めた。はじめは小さかったそれは、徐々に音を大きくしていく。

「なんだ……？」

ワンタローは横穴から顔を出し、よく目を凝らして下を見た。そして息を呑む。

「どうした、ワンタロー」

「崩れている……」

「何だと！」

「家も、城も、党も、積み上げた石がバラバラになって、木も折れて」

何人かが穴から体を乗り出した。ワンタローほど鮮明には見えなかったが、建物の形が崩れていくのと、土煙が高く舞い上がっているのが彼らにもわかった。

「お、俺ではない！ あんな土くらいで、崩れるわけが……」

「お前！ なんてことを！」

一人が髭の男を殴った。他のよその登る者たちは、穴から飛ぶように逃げていった。

「領主殿！ くそ！ 大変だ。一度下に戻るぞ」

「危険だ。下の崖が崩れはじめている」

ワンタローがさらに目を凝らすと、街の拡張と石材の確保のために削られた崖が、崩壊し始めていた。

「崖が崩れるわけがないだろ！」

「さあ降りるぞ」

「領主殿が死んじまったら、金ももらえねえ、登る意味もねえ！」

「おふくろ！ 親父！」

登る者たちはこぞって崖を降りはじめた。ワンタローは固まってしまっていたカワズに声をかけた。

「……お前も行け、カワズ。お前には妻と娘がいたはずだ」

「あ、ああ……そうだ。行く。まずいことになった」

顔を青ざめながら、カワズは降りる準備をする。

「ワンタロー、お前はどうするんだ」

「俺は登る」

「バカな」

「今じゃなきゃいけない。領主殿がいなくなれば、この休憩所も物資がなく維持できなくなる。登れるのは今しかない」

「そうか、お前は本当に、人じゃないんだな」

吐き捨てるようにそう言って、カワズは崖を降りていった。ワントローは今まで生きてきて初めて泣きそうになったが、すぐに登る準備をした。

「俺が天の地を見たら、領主殿も浮かばれるだろう」

ワントローは道具を使って、またスルスルと登り始めた。

ワントローは食料と水を持てるだけ引っさげて、崖を登る。休憩所についたら眠り、朝になると食料と水を新しくして、また登る。そして休憩所についたら眠り、朝になると食料と水を新しくして、また登った。休憩所には誰もいなかった。皆、下に降りていた。

「ここが一番上の休憩所か」

その休憩所は最も穴が浅く、水も食糧も無かった。投げ捨てられたいくつかの道具と自分の道具を取り替えた。

ワントローは登る。

腕が疲れると、一人一人が収まる小さな穴を掘り、そこで休んだ。

ワントローは登る。

雨が降ると小さな板を組み立て、雨水を多く集めた。

ワントローは登る。

鳥が増えた。縄のついた銚で捕まえ、穴の中で焼いて食べた。

ワントローは登る。

穴から這い出してきた虫を、炙って摘んだ。

ワントローは登る。

ワントローは登る。

やがて道具が壊れ始めた。残るは水筒と銚と穴を掘る道具だけ。

ワントローは素手で登った。

ワントローはスルスルと崖を登る。

ワントローは登る。

ワントローは登る。

意識も曖昧になってきた頃、手が何かを掴んだ。まるでへりでもあるかのような窪みだった。

ハッとして、ワントローは初めて辺りを見渡した。そこは今までに見たことがない、巨大な空間だった。上には大きな天が開いていて、下にはいくつも巨大な穴が開いている。ワントローはクスダミから遠い豎穴で育てているという、レンコンという作物を思い出した。その断面によく似ていた。

穴と穴の間のへりの上で座り、ワンタローはようやく人心地がついた。鳥がたくさんいたので、糸のついた銚で捕まえ、焼く道具もないので生で肉を食った。水を飲み、眠る。

起きると頭がスッキリしていた。しばらくぶりに熟睡していた。覚めた頭で考えたが、ついぞこの空間のことは分からなかった。

ワンタローは上を見上げた。広く大きな天であった。村で見るよりも、街で見るよりも遥かに大きな天であった。

「カワズよ。確かに登ると、天は大きくなったな」

無限に思えた崖の先は、すぐそこまで迫っていた。ワンタローはへりを渡り歩き、最も外縁の崖に捕まった。

ワンタローはその身一つで、スルスルと崖を登った。爪は割れ、ところどころ赤く剥けている。もう指先の感覚がない。しかしワンタローは気にもとめなかった。えもいえぬ高揚感が、彼の体を満たしていた。

ワンタローはついに、崖の先に手をかけた。彼は崖を登りきった。

「どうだ、村の奴らめ。俺はたどりついたぞ」

地面に寝転がり、空を見上げる。ワンタローは驚いた。天は青く、所々が白かった。そして白く光る玉が宙に浮いている。いや、ぶら下がっていた。

「これは……大光石か？ 天とは大光石のことだったのか？」

しかし見れば見るほど大光石であった。クスダミで見たそれよりも、表面はきれいであり、見ていられないほど光が強く、遥かに大きかった。

「神父よ。どうやら天は大光石だったらしい。お前たちがしていたことは、存外誰よりも正しかった」

ゴウンとどこかから音がなった。見ると、大きな鉄の塊が動いていた。その上には大量の光る石が積載されており、台が傾くとともにそれがばら撒くように捨てられていた。

ワンタローがその様子をながめていると、その鉄塊から白い人形のものが出てきて、ワンタローを指差した。その白い人形はワラワラと現れ、ワンタローに近づいてくる。

人の形をしているが、ひどく膨れていた。顔の部分だけが黒くテカっていた。ワンタローが一人困惑しているうちに、彼らは囲って円になった。

「スゴイ。マサカノボツテクルトハ」

「トイウカ、シタデイキテタンデスネ」

「アレ、コマッテル……カオガミエナイカラカナ。ヘルメットヲヌイダホウガ」

「ダメダ。ヒバクシテルカモシレナイ。ボウゴフクハヌグナ」

「マズハケンサニツレテイコウカ。トリアエズウエニレンラクシヨウ」

天は人々を見下ろしている。

コロナ禍における生活・研究活動

Life and research activities in COVID-19 pandemic

小岩正樹研究室一同

2020 年、日本全土で COVID-19 が蔓延し、これまで当たり前だと思っていた生活が失われた。研究活動においてもその例外ではなく、大幅な活動自粛が強いられた。ただ同時に、我々は改めて研究とは何かを自らに問い直す機会にもなった。本特集は小岩研究室一同のコロナ禍における研究活動の備忘録である。なお、掲載順は学年順とし、学年内では順不同としている。

■「コロナ禍における生活」——D4 伊藤瑞希

コロナ禍であっても通常の生活やルーティンが多く変化することはなかったと感じているが、社会人博士として活動している私にとっての大きな変化は以下 2 点である。

まず、社会人として在宅勤務・テレワークが普及することによる通勤時間の削減である。これは満員電車による時間・体力の消耗、ストレスの蓄積が無くなった他、自分のための時間を確保することに大きくプラスであった（WLB の実現にも寄与）。

次に活動形式の変化である。特にオンライン会議の普及により会議に伴う移動時間が大幅に削減され効率化されたように感じる（その分会議は増えたが）。オンラインによる会議やゼミ、学会発表を実施するためには通信環境や機器の整備、リテラシーなども重要であるが、長いコロナ禍の生活を経て皆次第に当たり前になってきたように感じる。コロナ禍が去ったとしても以上 2 点は継続してほしいと感じている。

建築史研究においては、現場調査による情報収集が必要となる研究ではコロナ禍は大きくマイナスに働いたと感じている。現場で調査することを通じて本来目的としていた情報収集はもとより、現場で考える・発想する・感じる・気づくといった行為は研究内容を大きく左右すると感じている。つまり現場調査というプロセスそのものが重要であるのだが、コロナ禍では満足な現場調査は実施できないことの弊害が大きいように感じる。

一方で、文書史料ベースでの研究では各所蔵箇所がオンライン対応や郵送対応といったコロナ禍の対応方法を整備してくれたことで、あまり遜色のない研究活動が出来ているように感じる。

ゼミや学会発表など学内・学外関係者と交流を持つ場でもオンラインが普及し、社会人博士としては助かっている。特に平日のゼミ参加や運営会議の参加などは従来難しかったが、オンラインであればどこからでも参加できるので参加頻度は向上した。ただ研究活動を対面で行わなくなったことで顔を突き合わせてのコミュニケーションがなくなったこと、とりわけ調査後の打ち上げが無くなってしまっていることは悲しい限りである。夏休みに暑い中汗をかきながら野帳を仕上げ、調査後に調査地の名物料理や地酒を楽しむ瞬間はやはり格別であり、建築史研究の醍醐味の一つである。コロナ禍が去ったら再度復活すべき文化であると感じている。

■「コロナ禍における生活」——D2 膝小涵

日本に来てもうすぐ二年になる。この二年間はコロナのせいで時間が以前よりも早くすぎて行くような気がする。自分は元々ちょっと内気の性格で、どちらかというと一人で過ごすことが好きなのだが、一人暮らしの自粛生活が長引くにつれ、時々人との繋がりや交流を懐かしく思うときもある。

研究の面において、最初はキャンパス閉鎖で図書館にも行けず、なかなか難航していたのだが、今はもうすっかり元通りとは言えなくても、そんなに支障が出ていないと感じている。コロナをきっかけに、大学や会社ではオンライン化がどんどん進んでおり、これはコロナ収束後にもある程度定着する可能性があり、時間節約の面から言えば良いことかもしれないが、私はやはり早く元の生活を取り戻し、旅に出たり、マスクなしで出かけたりしたいと思っている。

■「コロナ禍における生活」——D1 高瀬道乃

私は 2020 年度を修論生として過ごした。読んでいただける方にも興味深い事例のひとつかと思われるので、個人的な記録だけでなく、学年としての事例も含め記すよう努めたい。

まず、建築史研究室としての一年間の活動の大きな位置を占める「文献ゼミ」及び「プレ文献ゼミ」であるが、COVID-19 の影響が日本にも見られ始めた 4 月の段階に開始し、前期の活動が後期活動の基礎となるという点において、運営にはとても苦労した。例年の崩し字による木割書の読解は研究室にある辞書や資料を頼りに寝泊り（をするかのように研究室に缶詰）で作業をすることが型になっていたと思うが、この状況と同じような環境を修士 1 年生にどの様に提供するか、ということが大きな壁となった。また、そもそも指導と雖も修士 2 年が 1 年を「お世話する」ことが目的ではなく、また修士 2 年が「答え」を知っているわけではない関係性の中で、うまく学びあえるべきである。結果的には資料を提供するためにかなり工夫を行ったが、ゼミの中では新しい環境を活用した前向きな発表が多く、また、それぞれが改めてゼミの在り方を問いながら活動していたこともあり、質の高いゼミだったのではないかと感じている。一方、後期の文献ゼミでは大学施設や社会の資料提供の環境が向上したため、事前準備は各々の工夫によって、ゼミはオンラインと対面併用の開催ができる状況となった。ただし、一年を通し、この年でのゼミの質は確保されたが、刻一刻と状況が変わっていった 2020 年度の中で「新しいゼミの型」ができた訳ではない。また、当時の修士 2 年が「これまでの型」を知っていたからこそ対応できた部分もあるのではないかと感じている。他のゼミや研究会活動を含め、運営方法については引き続き模索すべきであると感じている。

次に、修士論文の執筆については、自分だけではなく複数の同期が対象や資料の変更を余儀なくされる状況となった。得られる情報の縮小と研究室で味わう雰囲気など外的要因も少なくなる中で、私個人として研究生活を支えたのは研究室同期有志での「世界ゼミ」だった。特に勤勉で才能あふれる同期だけでなく、修士設計と並行して論文執筆をしている同期もいた事が刺激になった。今後も、オンラインでゼミを開催できる上での時間と場所の制約が少ないというメリットを活かし、分野・大学に限らず仲間を集めてゼミを行ってみたいと思う。

そのほかにも、就職活動に大きな影響を感じたり、研究室旅行やレクリエーションなどが出来なかったりと、こんな状況でなければと思うことはいくつもあるが、これからも続く新しい状況の中で変化し続けることで、楽しみを増やしていくしかないだろう。結論として、オンラインを活用した研究室活動はまだまだ改善の余地があり、特異な期間を修論生として過ごした一人としても、引き続きよいものにしていけるよう提案していければと思う。

■「コロナ禍での研究」——M2 河合七海

2020 年 4 月 7 日、初めての緊急事態宣言が出され、大学は登校禁止、家での巣籠もり生活が始まった。私は大学が封鎖される前に急いで研究室へ向かい、研究に役立ちそうな図書を持ち帰った。所属している保存研究会での毎回の発表は、その持ち帰った図書を用いた。読むべき資料が決まっているため、ただひたすら、それを読み解き、レジュメにまとめる作業を行った。そのため、その図書を深く読み解くことができ、濃厚なインプットにも繋がった。その一方で、決まった図書の範囲内での研究になるため、その図書の著者に固執することになる。図書館に実際に足を運ぶことで発生する、目的図書の周辺にある関連図書の目移りによる資料のかき集めができない。そのため、様々な視点から研究対象を見つめ、様々な意見を比較し、吟味することができない。一方、図書館に通える生活は、資料収集に時間がかかり、研究序盤のレジュメの密度は落ちてしまう。短期的に見ると、前者のコロナ禍の研究法の方がレジュメの密度も濃くなるし、より吸収できている感覚もある。しかし、長期的に見ると、図書館に通って自由に資料収集のできる研究は、研究に客観性も増し、研究対象を総合的に評価ができるため、研究という側面においては後者の通常の生活に越したことはない。…というようなことを考えたコロナ禍での研究生活であった。

■「やっぱり飲み会は大事」——M2 杉本功太

コロナ禍によって様々なやり方が多様化した。Zoom や Meets といったオンラインコミュニケーションツールを効率的に活用し、必死で社会の波に乗った。これが悪い話かというそうではなく、気付かされた部分や学んだ部分は非常に大きい。レジュメはより分かりやすく作成する方法を学べたし、就活はより効率的に立ち回ることができた。しかし、それと同時に人と生で接することでしか学べないことも非常によく分かった。飲み会の席でコロナが蔓延してしまう理由も頷ける。やっぱり人とお酒を交わして会話をする、これが白熱しそこから生まれる新しい価値に私たちは高揚する。どんなに社会が効率化しようと、飲み会だけは企画せねばならないと思った次第である。

■「旅と病」——M2 原田佳典

未踏の地を旅することは、そのまま私の人生だった。2020 年 3 月までに延べ 388 日、蒸暑の天竺から酷暑の新疆まで、あるいは未だソ連邦の色濃き東欧からアンデス山脈仰ぐ南米まで。その旅路が疫病によって閉ざされるとは、思いも寄らなかった。

放浪の身を改め日本に留まる日々であったからこそ、新しい出逢いに恵まれたということは確かにある。私は決してこの一年余の生活を悪く思っていない。そう、もし仮にこの疫病がなければ、今後の身の固め方について思慮を巡らせることもなかっただろう。

それでも尚、ふとした時に見知らぬ異国に思いを馳せている自分が居ることに気がつく。学生生活の終着点を目前にして、未だ魂は大陸に置いてきたままだ。旅に病んで - 私の場合、「旅を病んで」とするのが正しいのかもしれない。夢は枯野を駆け巡る。

■「コロナ禍における生活、研究活動」——M2 水野結唯

コロナ禍での大学生活は、非常に「効率的」になったように思う。ゼミや会議、就職活動等をオンライン上で行うことが当たり前になったことで、長時間の物理的な移動が不要となり、余計なことをせずに自身の目的を遂行できるようになった。当然、オンライン上で意思疎通を図ることの欠点はあるが、何か活動しようとした際にオンラインという選択肢があるのは非常に便利である。ここで注意したいのは、あくまで選択肢の一つ、ということである。便利なものを利用し、最初のプラン通りに効率よく動くだけでは、正直面白い研究は出来ないとコロナ禍で実感した。例えば、図書館で意図していなかった本を発見した時、研究室で偶然居合わせた人と話しながら新しいアイデアが浮かんだ時に、そう感じるのである。このように、予測していなかった外部からの刺激が時に自身の糧となることで、研究をより面白くするのだと考える。「効率的」なものに甘えすぎないこと、それを忘れずにこれからも研究活動を続けたいと思う。

■「感染症と研究活動」——M2 森田歩

私がちょうど学部卒業式を控えた頃に突如流行したコロナウイルスによって、これから迎えようとしていた大学院での研究活動に暗雲が立ち込めていた。4 月頃には緊急事態宣言が発令され、早稲田大学においても授業開始の延期ならびに大学構内への立ち入り禁止が決まった。そういった中で、ZOOM や Google meets などのオンラインコミュニケーションツールの利用しつつ、研究活動が始まった。

2020 年度修士 1 年であった私は研究会や文献ゼミなどがメインの研究活動となっていた。特に大学構内や図書館への利用が制限されている状況では、資料を入手するにも困難であった。一方で、例えば国立国会図書館デジタルアーカイブをはじめ、オンライン上でも閲覧、入手可能な史料の豊富さを知ることになった。勿論、著作権等の問題によって閲覧できないものも多くあるが、研究会活動で対象としていた日本近代の一次史料なども予想以上に多く収集することができた。

研究においては史料はもちろん、時間や予算、人など様々な制限の中で行われており、理想的な環境で研究ができることは殆ど無いと考える。確かに、コロナ禍においては研究活動に大きな制限がある中でも、そういった制限のあるからこそできる研究もあるのではないかと感じた。

今回の感染症の流行を契機とし、zoom などのオンラインコミュニケーションツールの普及や、研究史料のオンラインでの公開が進み、研究の視点もより国際化、多様化していく。そういった可能性もあると、今回のコロナ禍中において私は考えた。

■「コロナ禍における生活」——M2 黄胤嘉

2020 年 1 月以来、新型コロナウイルスの影響で多くの人の生活を変えてきた。新型コロナウイルスの暴威で誰でも試練であり、留学生も例外ではない。国際線はコロナの影響で帰国できないし、帰日もできないし。学業と生活にはすべてある程度の影響を及ぼした。

どの国にしても、どの大学にしても、みんなはオンライン授業を受けている。オンライン開放カリキュラム学習モードとして、全世界の大学の教育モードに対して無視できない影響を与えた。このような全く新しい教育活動パターンは大学の教育活動に大きなチャンスと挑戦をもたらした。

■「コロナ禍における生活」——M2 王群

よく考えてみると、昨年度はいろんなことがあった。将来も歴史と保存の分野で研究と仕事を続けていくことを決意し、京都から東京に引っ越し、大学時代の友達とルームメイトになった。「誰か自分のことを待っている」という実感を与えてくれてルームメイトと猫に感謝したい。

研究の面では、日本の文化財保存制度や評価に関する本を読んだことがあるが、主な進歩は研究方法の面と思う。去年の文献ゼミの時には始められない苦境を今でも覚えており、今はやっと少しずつどの方向に努力するかを知っている。しかし、できるだけ他の人とのコミュニケーションを最小限に抑える必要があり、展覧会を見に行くことができないため、新しい情報を得るのは難しい、図書館にある大量の本から選択する方法を悩んでいる。最近はおどおどして川越に行った。コロナが早く終わって、現地調査をもっと順調に進めることを祈る。

自分はオタクとして生活しているため、家にもいい気持ちでいられる。唯一の残念は、長い間実家に帰ることができず、しばらく帰ることもできないかもしれないということだ。家で何か状況があった時、両親と一緒にいらなかったことを申し訳ない気持ちでいっぱいだが、これからも「心に安らぎを与えてくれる所、故郷だ」という思いで引き続き生きている。

■「コロナ禍における生活」——M2 種田駿

本稿を書くにあたって、自分がこのコロナ禍においてどんな生活を送ったのか思い出するために、スマートフォンで撮影した写真を約2年分見返した。はじめはきっとマスクをつけた状態の写真が多いのだろうと思っていたのだが、意外にも半分近くはマスクを外した状態であった。集合写真など、きちんと写真として残すときだけは顔を見せておこうと意識していたからだろう。

だが、そんなことよりも重大な点として、そもそも人を写した写真が極端に少なかったということに気付かされた。元より写真を撮る習慣というものが自分にはなく、何かしらのイベントの際に記念として撮影する程度ではあったのだが、それを差し引いても少なかったのである。つまり、この2年間は思い出に残すべき出来事がなく、友人と出かけたり酒を飲んだりといった娯楽のない淡白な生活を送っており、それがいつの間にか2年もの間続いてしまっていたということに気付いたのだ。

ただ、悪いことだらけでもなかったということもまた事実である。私の研究テーマである建築のデジタルアーカイブ化が、自宅にしながら全てを完結させようとする社会の潮流とマッチしており、手軽に観光気分を味わえるものとして注目を浴びるケースが散見されたのだ。決して多くの例が挙げられるわけではないが、それでも研究の取っ掛かりとなる事例が生まれたことは、ひとつの前進であると捉えることができるだろう。

■「人との繋がり」——M2 岩井亮

2020 年初めに緊急事態宣言の発令を受け、研究室での過ごし方も大きく変化し、「研究室入室人数の制限」「研究会・ゼミのオンライン開催」「研究室旅行の中止」「飲食の制限」など、人と関わる機会が極端に減り少し寂しく感じた。一方、研究活動において新たにオンラインを活用し、時間・場所・人数に制限されず会議ができるようになったことは非常に大きなメリットがあると感じた。実際、私自身が参加している市川赤レンガ建物の保存活動の中で、2021 年 3 月に Facebook で宣伝し、ZOOM のオンライン発表会を開催した。その結果、これまで赤レンガ建物の存在を知らなかった地元の市民の方をはじめ、全国各地の方々に存在を知ってもらい、新たに活動に参加したいという方にも出会うことができた。

以上のように今回のコロナ禍の生活は自分にとって、従来のアナログな「人との繋がり」の大切さと、デジタルな「人との繋がり」の可能性を認識した良い機会でもあったと言える。従来のように対面で侃侃諤諤と議論を重ねる研究の進め方に、オンラインの手法を組み込むことで議論の幅や成果も格段に広がると思うが、未だ最適な在り方を見つけていないので、今後、上手い共存の方法を試行錯誤していきたいと思う。

■「コロナ禍における生活」——M1 山下耕生

最近、建築を夢想しながら、鉛筆で線を引きキーボードを打つその手が怖い。戦禍、戦後を生き、四十五で自死した三島由紀夫は云う。

小説家にとっては今日書く一行が、テメエの全身的表現だ。

明日の朝、自分は死ぬかもしれない。その覚悟なくして、どうして今日書く一行に力がこもるかね。

その一行に、自分の中の集合的無意識に連綿と続いてきた「文化」が、体を通して現れ、定着する。その一行に自分が成就する。

それが「創造」というものの、本当の意味だよ。未来のための創造なんて、絶対に嘘だ。

僕たち歴史研には、設計にせよ論文にせよ、「創造」が負う責任と「文化」に対する理解と探求が求められる。修士設計を実現させてたくて小岩研を志望し、「創造」する事の恐ろしさや感動を目の当たりにしつつ、どんな「一行」が書けるかと自問する、少し息苦しい夏休み二週目。

■「コロナ禍における生活」——M1 尾高真輝

2020 年、大学 4 年になったと同時にコロナによる自宅待機の幕開け。ここに研究室生活を知らない学生が生まれた。来る日も来る日も PC の画面に向かう毎日。そして画面の向こうのまだ会ったことのない人達。お先真っ暗とはこのことかと実感した。そんな中でも自分には卒業論文を書かねばならないという使命があった。ただ、テーマ内容が地元に関連したものであったために、現地調査や史料収集が比較的容易であったのは幸いであった。研究室の人と初めてお会いしたのは 9 月 9 日のことであった。まさか初顔合わせが寺の実測調査だとは思ってもいなかったが。

コロナ禍になって分かったことが一つある。それは“当たり前”の素晴らしさだ。修士 1 年になった今だからこそ改めて思う。と同時に、色々な人に支えられて生きられたことを実感できた一年でもあったとも思う。これから先も未だグレーな生活ではあるが、今できること、今だからできることを見つけ、強く生きていかねばならない。

■「コロナ禍における生活」——M1 林真子

私は昨年（2020 年）、コロナ渦の中で卒論を執筆した。4・5 月は大学に入ることができなかったため、2 月末に図書館で借りた本と、インターネットで見つけた論文を読んで研究を進めた。「この先どうなるかわからない」という不安から、全速力で既往研究を読み進めた。また、実際に建築を見に行くことができなくても論文を書けるように、方針を考えた。その危機感のおかげか、色々と不自由はあったものの卒論は順調に進んだ。

私は 2020 年に、他の学年ではなく 4 年生でよかったと思っている。理由は、卒論が「逃げ場」になったからである。私の卒論のテーマは「擬洋風建築の色彩」であり、明治初期の文明開化の明るい感じが、研究していて楽しく、癒された。家にいるとテレビからコロナの話題ばかりが聞こえてきて辟易していた上に、（私は真面目に自粛しているのに）若者を悪者扱いするような発言もよく聞こえてきて最悪であった。そこで、よく「令和嫌い！明治に逃げる！」と言って、イヤホンで耳をふさぎ、パソコンを開いて、論文をあさったり、現存する擬洋風建築の色彩を調べたりした。「明治に逃げている」時間はとても幸せであった。

コロナ渦でなければ、研究の面ではたくさんの建築を見に行けたはずであり、生活はもっと快適であったはずなので、新型コロナウイルスは憎いものに違いない。しかし、好きなテーマの研究がストレスを減らしてくれた、私の 2020 年であった。

■「コロナ禍における生活」——M1 高橋知希

授業は楽になったと思います。心配症で荷物をリュックに詰め込んで登校してしまい、行き帰りで疲れてしまって、肝心の授業で眠くなってしまうということがなくなって、授業で得られる知識の満足感が上がりました。でも、スタジオとかで話している時のワチャワチャしてる雰囲気とかは無くなってしまって悲しいです。家だとメリハリがなくなると言われることが多い気がします、むしろ自分は「やるべきこと」と「趣味」の時間が明確に別れた気がします。もっとスタジオの時のように、雑談中から建築テーマのディスカッションになっていったりなどの、グラデーションがあるような環境での勉強も憧れたりしますね。

■「コロナ禍における生活」——M1 森田錬

そうではなかった生活をもう思い出せない程に疫病は日々の隅々にまで浸透してしまった。物事のあらゆる尺度がコロナを基準に置き換わった。その渦中にある私も例外なくコロナに依存した生活を送っている。さぼれることは徹底的にさぼる。コロナを言い訳にすれば自分さえも騙せてしまう。そんな自分の弱さをまざまざと見せつけられて忸怩たる思いもするが、それがおまえの本質なのだ、と目くじらを立てられた私は感謝さえしている。きっとコロナがなければ自分では気付けなかったし、気付いても遠ざけただろう。

そうではなかった生活には戻れない。いや、戻るべきではない、あの頃の人間は間違っていたのだと地球が我々に訴えているのかもしれない。であれば、未来で私たちはどうすべきなのだろう。ぜひ地球に問うてみたい。その前に、コロナを言い訳にいつまでも家にのさばる私を、愛犬はどう思っているのか気になるところだ。どうかうんざりだと言わず、愛していると言ってほしい。

■「コロナ禍における生活」——M1 田中茉優子

コロナ禍の研究活動や生活は自分的にはさほど苦ではなかった。授業が全てオンラインになったことで、時間に余裕ができ、卒論に没頭することが出来た。私は卒論のテーマがバロック建築だった為、大学に資料が豊富に揃っているわけでもなかった。コロナ以前であれば、国内の図書館に資料を探しに行くことしか思いつかなかったが、コロナを理由にすべてネットで探した。今は大学図書館や美術館案が所有している資料をデジタルアーカイブ化しているため貴重な資料もすぐに確認することが出来た。その美術館や資料にたどり着くことは大変だったが、家で作業ができるというのは体力的にかなり楽なものだった。

ただ卒論を執筆する前に現地調査を行えなかったのは残念でならない。ローマ旧市街の地図が頭の中にある状態で実物を肌で感じてみたかった。バロック建築は建築だけで成たつものではないため美術品や聖歌、文字、空気すべての中に埋もれていたらどんな卒論になっていただろうと考える。

コロナ禍の生活は時間の余裕ができた反面、実物を味わえないという負の要素もある。それに加えもはや言葉だけが浮いている緊急事態宣言の連続で夜もしんと静まり返っている。そんな風になってみて、夜でも人気がある街のそばにすることが好きだったんだなと思いながら、この変わらない状況に辟易している自分を感じている。

■「コロナ禍における生活」——M1 小林創

思えば昨年三月、コロナウイルスが本格的に猛威を奮い始めた頃、僕はイタリアにいた。

憧れの海の都ヴェネツィアから始まり、なまじ建築学生らしくフィレンツェやローマの美しい建築たちに触れ、車窓に映る村落の穏やかな情景に心酔しながら美しきシチリア島まで南下するという齢 20 近くの若者にとっては壮大ともいえるべき旅路の中途にいたのだ。

今思えば勢いが先行して細部への思慮に欠ける旅だったので、激動の最中の異国では当然、数多くのアクシデントに見舞われた。西北の都市ナポリはロックダウン中で立ち入ることができず、フィレンツェではジブシーらしき移民集団に足蹴にされ、シチリア島では帰りの飛行機が欠航し、危うくシチリアにしばらく住むことを余儀なくされた。

運良く新たな航空券が取れて無事に帰って来れたから言えるものの、懐古すると人並み以上にコロナ禍での他国の状況に触れることができたのではないかと能天気にも誇りに思えるような旅でもあった。

一方で、感染症というフィルターがここまで境界を際立たせるのかと、自国以外の国との距離を凄く遠いものを感じるようになってしまったのも事実。

研究活動でも他国の研究というだけでハードルが上がるような感覚がやはり付き纏う。

いや、もっと言うと図書館や大学に行くのも以前より億劫に感じる。

自室でパソコンでできる研究活動に侵されてしまっているなどと言う実感がしっかりとある。

そんな怠惰な研究活動を感染症のせいにして早一年。

ワクチン打ったらそんな言い訳通用しねえよと自分を奮い立たせる今日この頃です。

がんばります。

■「コロナ禍における生活」——B4 菊地彪

外に出る機会、運動する機会や、人と話す機会が減った。オンラインでの会話も、全員で一人やら二人やらが喋っている話を聞けなかつたりと、窮屈な生活を強いられることが多かった。

また、趣味のサウナに一人でも行っていたが、世間体的に少し行きづらくなったり、緊急事態宣言中は密空間であるサウナのみ行っていなかったりと、数少ない趣味の内のひとつがなくなった期間もあった。

しかし、映画を観たりと普段後回しにしていることをやる機会になった。

■「コロナ禍における生活」——B4 甘楽葉名

新型コロナウイルスが拡大していく中で、私を取り巻く環境が多様化していったように感じる。大学生活においては、設計課題や授業など以前まで対面で行っていたものが、全てオンラインに変化した。私は今まで、現地調査やエスキスは対面で行っていくことで意味を成すと考えていた。しかし、実際にコロナ禍によって不可能になったことで、必要な情報収集やコミュニケーションを効率的に行うことができるようになった。例えば、オンライン上で事前予約をしないと図書館に行くことが出来ないため、予約が取れた時になるべく多くの情報を得られるよう短期集中的に情報の選定をする事が必要不可欠になった。また、エスキスも週一回しかなく、事前に先生を予約しなくては行けない為、より準備をして資料を用意した。一方、コロナ禍の生活が当たり前になった今、インターネット情報の取捨選択スキルがより必要になったと感じる。今後もオンラインベースの卒論作成が余儀なくされているが、本当の情報を得る努力をしていく必要があると私は考える。

■「コロナ禍における生活」——B4 唐木海渡

今年から研究室に配属され、研究を始めた身であるので正直本来の研究の仕方がどのようなものかわからない。そのため憶測でしかないのだが、気軽に実地調査などに赴けなくなっているのは研究に影響を及ぼしているのではないかと考える。

私の場合、先に研究方針を立て、その条件に合う地を探すという方針で研究対象とする土地を選定した。ただ、そうして探した結果、実際にいったこともなく、これから行けるめども立っていない場所を選んだことに、一抹の不安が残っている。

もちろんその前にも何度も検討を行い決定をしてはいるが、私の読んだ限られた資料の、ほんの一部の情報だけから判断しているに過ぎない。情報が偏っているのではないか。本当にこの地で良かったのか。もっと他に良い条件の場所があったのではないか。本当は適していないのではないか。実際に行っていない分、その土地に関する情報も私自身の所感も何もかも足りないことがその疑念を大きくしている。かといって実際に行くこともできず、疑念を抱えたまま研究を進めるしかない。

デジタルアーカイブなどの資料が充実したことで各地に行かなくても研究を進めることができるようになってはいるものの、やはり実際に行くことで補える部分も存在する。コロナ禍で外出が難しくなったことで、実際に訪れることの重要性を痛感した。いまは一刻も早く感染が収束し、その地を訪れることができる日が来るのを祈るばかりである。

■「コロナ禍における生活」——B4 斎藤祐希

コロナ禍における外出や会食の自粛、マスクといった感染防止対策、可能な限りオンライン化された大学生活……そういった環境の変化は、私にとって大した問題ではなかった。より正確に言えば、悪影響を及ぼさなかったのである。

もともと大学への入学より今まで、授業以外は自宅中心の生活を行っていた。友人と休日に会ったり集まって飲み食いしたりもしない。私はそういう生活が好きだった。外出自粛はそれまでの私生活を変えるどころか、肯定するものであったのだ。その上、飲み会といったものをわざわざ断らなくても良くなった。酒と喧騒が苦手な私にとって、それはなるだけ避けたいものであって、例えば合宿中に飲み会を断って一人温泉に行き奇異な目線で見られたり、あるいは飲み部屋の押入れに隠れてやり過ごしたり、そんなことをわざわざしなくていいのは、自分本位ながら自粛に助けられた事例である。さらにはマスクをすれば顔が半分隠れるため、髭を頻繁に剃らなくて良くなった……これは不衛生が過ぎるか。

研究に至っては変化そのものがわからない。私達学部四年生が本格的に研究を始めたのは今年に入ってからであって、その頃には体制といったものが既に整っていた。私にとって研究といえば今のこれであり、これでしかないのだ。

私はコロナ禍の生活というものを、比較的ポジティブに捉えて過ごしている。あとどれほど続くのかはわからないが、私に限っては何度緊急事態宣言を出されようが、大したストレスもなくこの生活を続けられることだろう。ただ敢えて言うならば、外でふとマスクを外したとき、雨の降りそうな匂いだったり、草を刈ったすぐ後の匂いだったり、照りつける日差しの乾いた匂いだったり、そういったものを感じたとき、早く終わらないかと思うのだ。

■「コロナがなかったら。」——B4 中村碧宙

コロナがなかったら、研究費でスウェーデンに行って、アスプルンドについて研究をしたかった。アスプルンドと今井兼次の2人の交流から、両国に与えた影響について明らかにするもの。そして、その論文が評価されて、アスプルンド財団が何かに認められて、私が死んだ際にはストックホルムの森の墓地に埋葬してほしい。

コロナがなかったら、高田馬場一丁目を舞台に映画を撮りたかった。高田馬場一丁目の景観・建築を映像として記録しておきたかった。高田馬場一丁目は江戸・大正・昭和・平成の時の記憶が蓄積されている場所だから。いやこれは、今でも出来そうだな。しかし、昨年一年間に渡って映画制作をしていたが、コロナ禍での撮影は本当に大変。そして、既に武井日本館も建て替わってしまった。

コロナがなかったら、研究室の先生・先輩・同期の人たちと飲みに行きたかった。飲みの席では無礼講だから、遠慮なしに多くのことを議論できたのに。そして三軒目くらいに連れてきてもらったバーで、隣のお客さんに桂離宮の魅力を延々と語って、気づいたら朝になっているのに。

■「コロナ禍における生活」——B4 永尾美沙

コロナウイルスが蔓延し始めた昨年の4月から大学や就活はすべてオンラインに切り替わり、最初は多少の不安を感じていたが、この約一年半はかなり充実した時間にできたと感じている。

というのも、コロナ以前私は、時間があれば外食や飲み会に行き、深い意図もなくダラダラと人付き合いを続ける日々で、「思考する」という時間を放棄しているように感じていた。

なんの生産性もないような遊びを続け、大学の授業もさほど集中できていなかったタイミングでのコロナは、むしろ私にとって「自分に向き合い、ちゃんと考える時間」になり、かなり生活が豊かになった。

私は誰とでも仲良くできる性格で、勉強も遊びも周りにたくさん人がいることが当たり前の生活だったが、コロナ禍になって「人に会わなくても良い」という当たり前が生まれたことで、これまでかなり自分が無理をして生きてきたことに気付けた。

他人のご機嫌を伺う時間を無くし、純粹に自分に向き合う時間が増えた事で、「学ぶ」ということの楽しさにも気付けたように思う。

オンデマンド授業では、自分のやる気が最高潮の時に受講することができたり、気になる部分はリピート再生して理解を深められるなど、柔軟な学び方ができた。自発的に学ぶことがこれほどまでに楽しいと思えたのは、今が初めてである。

コロナという未曾有のウイルスによって命を落とす方が増えてしまったこの時代で、「亡くなった方の命を無駄にしない」ようには、一人ひとりがきちんと対策すること他ならないと思う。

対策や自粛生活は、この先「助かるはずの命」を増やすためだと信じて、全てネガティブに捉えるのではなく、この生活を有意義だったと思える未来のためにポジティブに、これからの日々も過ごしていきたいと思う。

■「コロナ禍における生活」——B4 鍋澤佳奈

コロナ禍でない研究活動を知らないなので、こういうものかと受け入れている。研究活動に限らず、日々の生活において、あらゆる行動に制限がかかる状況で、できる範囲でやりたいことをやるしかない。

ただ、人と気軽に会えないのが一人暮らしの身には辛いときもある。去年一年実家暮らしを謳歌した反動もあり、足の小指をぶつけても痛いし騒ぐ相手もないことに寂しくなったり、活動記録を付けるまでもなく、毎日家で一人食事をしていることにふいに悲しくなる。普段友達と会ってとりとめのない話を延々とする機会が減り、余計に「ひとりだ」と感じる。そういうときに自分の機嫌を取って気分を上げるのは随分上手くなった。自分の順応能力を褒めてあげたいが、原因を考えるとやるせなくもある。コロナの影響が案外精神面に響いている。

研究活動には支障はないと思っていたが、コロナの影響がない研究活動も経験してみたかったな、と少し心残りかもしれない。

■「コロナ禍における生活」——B4 林優希

2 年生の春休み、フランスとスペインでのひとり旅をしている最中に、新型コロナウイルスの流行が始まった。幸い、現地で嫌な思いをすることはなかったが、感染の不安以外にも、ヨーロッパの国などでのアジア人への差別行為のニュースなどもたびたび目にし、かなり緊張しながら旅をしたのを覚えている。

新学期が始まると、急に家に籠りきりの生活となり、授業は全てオンライン化、その他の活動も大きく制限された。もともと一人の時間を過ごすことが得意なほうであると思っていたが、3 年生の一年間を思い返してみれば、この生活にはずっと慣れることができなかったように思う。授業はあるが、間延びした長期休みを過ごしているような感覚があった。気軽に色々な人に会えなくなってしまったのもストレスになり、やはり、自分が作ったものや自分の考えを、実際に友人などと会って話しながらアウトプットする行為というのは重要であると感じた一年間であった。

学年が上がり 4 年生になると、少し自粛生活も緩和された。その前の一年間を取り戻すように、地域のサークルで音楽を始めてみたり、新しい形で絵を描いてみたり、新しいことにたくさん挑戦し始めた。研究室という新しい環境にも入り、慣れないことやうまくいかないことも多くあるが、充実した生活を送っている。

時々、もし自粛生活が無かったら ... と考えることはあるが、考えても寂しい気分になるだけなので、今は目の前のことにしっかりと向き合うようにしている。研究生活も、まだ始まったばかりではあるが、色々なものを見て、吸収していきたいと考えている。

■「コロナ禍における生活」——B4 矢部瑞季

コロナウイルスというものが中国で発生したと聞いた時、私は海外旅行の計画を立てていた。2020 年 2 月末に実際に旅行に行き、3 月もどこか他人事のように思って普通に街を出歩いた。しかし、瞬く間に感染拡大、緊急事態宣言発令を経て春休みが 1 か月延び、授業もオンラインになった。もともと大学に通うことは苦ではなかったし、遊んだり飲みに行ったりもよくしていたので人に会えない状況は個人的にとっても辛いものだった。特に設計課題を 1 人部屋にこもって行うのは精神的につらかった。エスキスは全員参加のグループで希望制が続き、作品に自信のなかった私は手を挙げることができなかった。大学から家が遠いのでお手伝いさんを呼ぶのも申し訳なく、模型も全て独りで作った。1 年生の時から楽しみにしていたスタジオ・アトリエ生活が一切できなかったのは本当に残念に思っている。今年度からは対面授業含め元の生活に戻りつつある。コロナに気をつかう生活はまだしばらく続くだろうが、一刻も早く何も気にせずに人と人が集まれるようになることを願っている。

後記・執筆者略歴

Postscript

* * * * *

★本稿の基である研究会を行った 2020 年度は感染症の流行に伴って、研究活動も困難でした。その一方、関東大震災という災害に焦点を当て研究を進めていく中で、観光を起点とした都市や建築のもつ力というものを実感しました。また気軽に旅行や観光ができる世に戻ってくれればと願うばかりです。最後になりますが、研究会に参加し共に研究を進めてくれた、早川実尋氏、原田佳典氏、高橋柚香氏にこの場を借りて感謝の意を表します。

森田歩

1996 年生まれ

2020 年 3 月早稲田大学創造理工学部建築学科卒業

2020 年 4 月から早稲田大学理工学術院創造理工学研究科建築学専攻入学

日本建築史ゼミ 主な研究テーマ・日本の民家建築について

卒業論文「民家における大黒柱の研究 ―近畿地方の大黒柱調査を通して―」

★ある日弟と地球平面説において端が崖になっていた場合、どのような建築、文化が生まれるのかという議論を交わしました。その際に裏返しとして考え出したのが、堅穴の世界です。この度はその世界を舞台に物語を書かせていただきました。堅穴の世界で人々がどのように考えどのような建築を建てるのか。学部四年の浅学の身ではありますが、自分なりの建築観をもって表現に挑戦してみた次第です。今回はこのような機会をいただきありがとうございました。

斎藤祐希

1998 年生まれ

駒場東邦中学高等学校卒業

2018 年 4 月早稲田大学創造理工学部建築学科入学

2019 年 10 月「さいとうさ」として「めっちゃ召喚された件」出版（漫画版連載中）

2021 年 4 月より建築史研究室所属 / 西洋西アジアゼミ

お知らせ Submission

○「史標」原稿募集規定

本誌への投稿を歓迎いたします。論文、報告、書評、人物紹介、随筆等、内容は自由。建築学以外の論考に關しても可。以下の連絡先までご連絡いただければ、フォーマットテンプレートをお送りいたします。原則として、偶数ページにおさめることとし、図版には典拠、キャプションを付加してください。また、執筆後記(210文字以内)、略歴(124文字以内)のご送付もお願いいたします。

○質疑・討論原稿募集規定

載原稿に対する質疑や、討論の申し込みも受け付けております。ページ数は自由で、その他の原稿の形式に關しては上記のものと同一で構いません。提出期限は随時。多数のご質問・ご批評をお待ちしております。

○お問い合わせ

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理工学部55N号館8階10号室
建築史研究室内「史標」出版局
Tel. 03-5286-3275
Fax. 03-3204-5486
mail address : shihyo @ lah-waseda.jp

「史標」第69号

2021年10月号(10月21日発行)

編集：尾高真輝、田中茉優子

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理工学部55N号館8階10号室
建築史研究室内「史標」出版局
Tel. 03-5286-3275
Fax. 03-3204-5486
mail address : shihyo @ lah-waseda.jp

「史標」第 69 号 (2021 年 10 月号) 「史標」出版局発行